

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター
第3回ふくしま浜通り文化育成と発信事業ワーキンググループ会合
議事録

日時：2019年11月29日13:00～16:45

場所：福島県広野町公民館2階小会議室

記録：朱 鉦

プログラム

- | | |
|-------------|--|
| 13:00～13:20 | 司 会：安部 良（安部良アトリエ級建築士事務所、明治大学兼任講師）
開会挨拶：松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）
小松和真（福島県広野町復興企画課課長）
安部 良（安部良アトリエ級建築士事務所、明治大学兼任講師） |
| 13:20～14:10 | 報告1：ヴィヴィアン佐藤（美術家、非建築家、ドラッグクイーン）
「七戸町ドラキュラ de 町おこし事業の紹介」 |
| 14:10～14:20 | 休憩 |
| 14:20～15:00 | 報告2：畑まりあ（アーツカウンシル東京・事業推進室事業調整課事業調整係）
「TURN プロジェクトについて」 |
| 15:00～15:20 | 報告3：森野晋次（現代美術作家・アートプロジェクト気流部代表）
「『時の封～ひろの2120』プロジェクトについて」 |
| 15:20～15:30 | 報告4：永井祐二（早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授）
「第5回ふくしま学（楽）会（2020年1月26日、ならばCANvas）について」 |
| 15:30～16:45 | 総合討論 |
| 16:45 | 終了 |

開会挨拶

安部 良

- ・本ワーキンググループ（以下、文化育成WG）は、従来の大型芸術祭ではない地域アートを、福島県浜通り地域で広域的に展開する新たなアプローチを模索してきた。2019年6月14日に第1回文化育成WGを開催し、アトライターの住吉智恵さんから、世界と日本の芸術祭の現状と特徴を紹介いただいた。10月7日の第2回文化育成WGでは、ヴィヴィアン佐藤さんによる青森県七戸町で実施した地域アートプロジェクトの報告を踏まえ、従来の大規模な芸術祭とは違うボトムアップ型の地域アートの展開について議論した。
- ・本日の文化育成WGでもヴィヴィアン佐藤さんをお招きし、浜通り地域で報告していただく。また、東京で活動しているTURNプロジェクトの畑まりあさんから、TURNプロジェクトのアート×ダイバシティという思想とその活動を紹介いただく。TURNの新しい概念から何か有益な示唆が得られると良いと考えている。その後、現在、広野町で行っているアートミュージアム&ラボ・プロジェクト「時の封～ひろの2120」の進捗状況や来年1月26日に開催予定の第5回ふくしま学（楽）会について、森野さんと永井さんから報告いただく。

松岡俊二

- ・2019年1月27日に檜葉町で開催した第3回ふくしま学（楽）会で、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターのこれまでの議論を総括し、長期的かつ広域的な観点から福島県浜通り地域の将来像を示すため、ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ（SI構想）を提案した。以下

の3点がSI構想の柱である。

- ①エネルギー産業遺産・原発事故遺産（1F）・震災復興施設のネットワーク
- ②1Fやエネルギー遺産群を核とした、地域の新たな魅力や価値を創造する地域アートの展開
- ③エネルギーと復興を学び・体験する農泊や渚泊など組み合わせた広域DMO（地域経営体）の創設

- ・第2の柱では、従来の芸術祭という形にこだわらず、浜通り地域で広域的に展開できるような新たな地域アートのあり方について議論してきた。今後、第2の柱の実現のため、東京芸大のDOORプロジェクトやアーツカウンシル東京等が主催するTURNプロジェクト、Jヴィレッジとの連携なども検討したい。
- ・地域アートの展開は第3の柱の「交流と場づくりの地域経営」にもつながる。第3の柱は、地域アートや1Fの利活用を通して、廃炉産業だけに頼らない自律的で持続可能な地域づくりの要に位置する。実現に向けて、広域DMOなどの組織設立も考えている。2020年1月26日の第5回ふくしま学（楽）会に向け、今回の文化育成WGなどからアイデアを創り、具体的な提案にしたい。

小松和真

- ・震災以後、広野町はインフラ復旧を中心に取り組んできた。広野町では住民帰還率が80%を超え、1Fなどの作業員も含めると、事故前の人口を上回っているが、双葉郡では帰還率はまだ20%程度しかない。住民が戻らない理由の一つとして、住民の地元への自信を失っていることが挙げられる。したがって、浜通り地域に最も必要なのは、住民が地元で安心して暮らせる環境づくりであり、特に文化やアートを通してこの地域へのプライドを取り戻すことが重要である。今回の文化育成WGから様々な知恵やアイデアをいただき、地域の魅力を再発見する地域づくりのあり方を考えたい。

報告1 ヴィヴィアン佐藤

七戸町ドラキュラ de 町おこし事業

- ・建築（Architecture）と建物（Building）とは別ものとして捉えている。人間がコンクリートなどで作ったり、使ったりするのは建物であり、その背景にある関係性を表現するオリジナリティは建築である。
- ・最近多くなってきた町おこしのプロジェクトも「建築を作る」と言える。しかし、多くの町おこしプロジェクトでは、大都市のコンサル会社が仕事として契約期間中にしか活動せず、結局、地域には何も残らない。町おこしプロジェクトにおいては、契約期間に関わらず、長期的に取り組むのが私のスタンスである。
- ・青森県七戸町で実施した町おこしプロジェクトを紹介する。七戸町は青森県の東部に位置し、なんとなく悲観的な雰囲気が漂っている地域である。最初は、衰退している商店街で1日だけのイベントのプロデュースを町に頼まれたが、1日だけではインパクトが薄いと考え、地元住民に地域の魅力を感じさせ、地域に自信を持てるように、長期間のイベントを企画することとした。
- ・地域の魅力を考え、地元で地域特産のニンニク、トマト、ヒナコウモリ、中世のお城という4つの固有の要素を発見し、2014年にニンニクから連想したドラキュラをキーワードにした町おこし事業を始めることになった。住民は最初この事業に対してネガティブな態度であった。私は、画家・ピカソによって始められたキュービズムのように、人であれ地域であれ、様々な角度から見ることを重要であると考えている。地域社会と人々の潜在的な魅力と価値を見出すため、様々なワークショップを開催した。

①空間についての「じぶん地図」

じぶん地図は、ワークショップで住民に自分の家、学校や職場、そしてよく遊びに行く場所の3点を描いてもらい、その途中で様々な目印やものを描き込んでもらうものである。住民自身が今まで経験したことや、これから起きてほしい「未来」や「願い」を書き込むことで、自分と世界との

つながりを目に見える図やイラストで地図の上に表現するものである。

②時間についての「ここではない『ここ』にいる人へのラブレター」

このワークショップは、ここ（いま）ではない、既に存在しない過去、もしくはこれからやってくる未来の人々へのラブレターを書くものである。過去・現在・未来は時間の流れ通りに順番に発生すると一般的に認識されているが、我々の生きている現在は、既に過去や未来を含んでおり、言い換えれば、過去・現在・未来が共存している。ワークショップはこの考えに基づき、現在の地域とそこに住んでいる人々のアイデンティティを捉え直すことを目的としたものである。

③語り部プロジェクト

地域に根付いている観音信仰や、地元のボランティア活動など、住民が自分の歴史を語るプロジェクトである。このプロジェクトでは文字記録だけでなく、映像の撮影も実施し、住民の喋り方や立ち振る舞いなどを全て記録した。

④ダンボールハウス

商店街の小売店をダンボールで制作するという子供向けのプロジェクトである。大手スーパーの統一的な店舗の様子とは異なるオリジナルな店構えをダンボールで作り出し、そこで子供にロールプレイをしてもらう。

⑤ボロ文化

この地域には、着物などをつぎはぎして何十年も着ていくというボロ文化がある。ワークショップで地元の婦人たちが毛糸で小さなカバーを織り、それで自転車や電柱を包む。「早い・強い・大きい」商業経済が一番だと思われてきたが、毛糸のカバーのような繊細なもので商業経済の道具を包むことは、普段は重視されていない「ゆっくり・繊細・小さい」という価値観を表現している。

- ・以上の5つのワークショップの他に、七戸町で子供をドラッグクイーンに変装させる七戸キッズ DQ プロジェクトを実施した。世界中で LGBT が話題になっているが、マイノリティには性的基準だけでなく、個性や価値観も含まれている。人間には様々な価値観や個性があり、特定の線引きをすることには意味がないと考えている。七戸町の子供も同じように、自分の価値観と個性を持っていて、それを理解してくれない人が多くいる。キッズ・ドラッグクイーン・プロジェクトを通して、子供たちの普段見られない個性を表現することを考えた。

報告 2 畑まりあ

TURN プロジェクトについて

- ・TURN プロジェクトは、人と違うことに価値を見出そうとするアートの特性を活かし、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの属性や背景を超えた、多様な人々との出会いと交流を生み出すアートプロジェクトである。TURN は 2015 年から始動し、2017 年に東京 2020 公認文化オリンピックとして実施してきた。ただ、オリンピックだけのためのプロジェクトではなく、2020 年以降もレガシーとして継承されていくことを目指している。
- ・運営体制については、TURN は東京藝術大学美術学部長の日比野克彦教授が監修し、アーツカウンシル東京の森司さん（アーツカウンシル東京事業推進室事業調整課長）がプロジェクトディレクターを担っている。主催は、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人 Art's Embrace、国立大学法人東京藝術大学である。
- ・TURN は、TURN 交流プログラム、TURN LAND、TURN フェス、TURN ミーティングという4つの柱がある。

①TURN 交流プログラム

アーティストと、福祉施設や社会的支援を必要とする人々が時間を重ねて交流し、協働活動をす

るプログラムである。また、社会や日常で意識化されていない課題への気づきを目的としたアーティストによるリサーチも行う。例えば、舞踊家やアーティストたちが福祉施設を訪れ、障害者とスタッフがワイン醸造をしている空間で身体表現を通して交流したり、日々に行なわれているアクティビティの時間を一緒に過ごしたりする。

② TURN LAND

福祉施設や団体が主体的になり、アーティストとともに参加型のプログラムを企画する。場所のもつ従来の機能に、市民が集まることができる地域にひらかれた文化施設としての役割が加わり、TURN を日常的に実践する場をつくり出す。例えば、年間を通してアーティストと一緒に綿を育て、糸づくりをしている。

③TURN フェス

1年1回、TURN 交流プログラムや TURN LAND を実施する多様なアーティストや交流先での活動が一堂に集まるフェスティバルである。展示作品の鑑賞だけでなく、共同作品制作のワークショップ、トークイベント、オリジナルなプログラムなど様々なコンテンツを通じて TURN を体感する場となっている。

④TURN ミーティング

TURN の可能性を共有し、語り、考えあう場であり、トークイベントの形でやっている。参加アーティストや交流先などの関係者とともに、各分野で活躍するスペシャルゲストを招き、様々な視点から TURN を考察する。

- ・これまでに約 70 名のアーティストと、知的障害や自閉症を持つ人を対象とした施設、高齢者支援施設、セクシャルマイノリティの人々の相談施設、ひきこもりの人たちを対象とした学びの場、子ども食堂、聴覚障害者を対象にした施設などの約 60 の施設や団体と連携している。2016 年から、日本国内での活動と同じコンセプトの上に、日本の伝統的な技術や所作を加え、ブラジル、エクアドル、キューバなど海外でも活動を展開した。
- ・TURN では、作品をつくることを目的にするのではなく、人と人との交流そのものを大切にしている。交流により、他者の関心や自分とは異なる価値観を知り、学びあう。アーティストが、マイノリティと捉えられるコミュニティに通うことで、お互いにこれまで気づかなかったものを見つけあい、今まで見えていなかった可能性や価値を見出すかもしれない。それはいろいろな社会課題の糸口を見出すきっかけになるだろう。
- ・90 年代からの日本各地でのアートプロジェクトの動向や効果などについて賛否両論あるが、特定した社会的文脈の中で、様々な属性を持つ人々のコミュニケーションを誘発し、社会的課題の糸口を見出すことに貢献するのが、アートプロジェクトの一つの特徴といえるかもしれない。

【質疑】

松岡:TURN プロジェクトが誕生した経緯は何か。最初は何を目指していたのか。また、何を「転換」したいのか。

畑:日本財団によるプロジェクトが今の TURN の前身である。日比野克彦先生を監修に、アートと福祉を軸に展開され、アール・ブリュット美術館 4 館で展示も行われた。日本財団は障害者による表現や作品への支援を精力的に行っている一方で、現在の TURN は交流そのものを重視し、また身体の障害者に限らず、ひきこもりやセクシュアリティなど様々な領域を視野にいれ、よりダイバシティを追求するものである。多様性のある社会を目指し、多様な活動から生まれる問いや価値観を発信していきたい。

松岡:TURN プロジェクトはアーツカウンシル東京の全体的なビジョンに入っているのか。

畑:入っている。複数の組織が連携しているプロジェクトのため、他の組織の意向も配慮している。また、東京都が主催に行っている事業でもあるため、今までの活動は基本的に都内で行ってきた。今後もし体制が変わることがあれば、東京に限らず、他の場所での展開も検討されるかもしれない。

森野:私の知人もアート×福祉の活動を展開している。彼女の活動は障害者とのコミュニケーションから生まれたアイデアとその価値を、社会の中に新たに生み出そうとしている。そういう意味ではTURNの活動とよく似ていて、これまでのいわゆる「障害者」や「障害者アート」のレッテルは、それ自体がそれぞれの面白さや可能性を隠してしまっていることがあるので、TURNのような試みはすごく興味が有り、表現者、アーティストとしても可能性を感じている。

畑:ある一つのことや人の特性に対しても、それぞれの見方がある。TURNはその違いを大切にするようにしている。TURNを通して、人々は異なるモノの捉え方を共有し、お互いに変わっていく。

報告 3 森野晋次

「時の封～ひろの 2120」プロジェクトについて

- ・「時の封～ひろの 2120」の第1回ワークショップは、明日（11月30日）より2日間開催する。今年の6月から今まで広野町で採集してきた植物をラミネートして作品を制作してきており、ワークショップでは参加者と一緒にこの作業を続ける。最終的なインスタレーションには約5,000～6,000枚が必要となる。
- ・現在周辺の森林が除染されていない状態であり、立ち入りできない。震災以降、町中を中心に復旧活動を実施されてきたが、「時の封～ひろの 2120」を通して、復興における見逃された森林の存在を提起したい。
- ・双葉郡の二つの葉は、昔の檜葉郡と標葉（しねは）郡のことであり、二つの郡が合併し、そう呼ばれていた。その標葉は昔のこの地域の豪族の苗字の音読が由来であり、郡名としては、標（しね）という漢字があてがわれた。標（しね、しめ）の漢字は神様を意味する事も有り、万葉集の中では“しめ”縄のしめ＝標として表記されている。つまり、標葉とは神様が宿る葉とも理解でき、玉串を例にすると常緑樹の尖った葉、サカキやヒサカキが代表的である。ただ、双葉町の「町民の歌」の中では椎葉（しねは）との表記もあり、その椎（しい、ブナ科の常緑樹）がこの地域の植物の種類を示していたと考えられもするが、椎は日本列島の中では比較的温暖な気候の中で生育していて、檜葉郡の檜（なら、ブナ科の落葉樹）の北部に位置する標葉郡としては植物分布的には説明がつきにくく、私の憶測では常緑樹として東北地方に多く自生しているヒサカキを意味し、双葉郡は常緑樹と落葉樹の豊かな森が広がっていたのではないかと、又、その豊かな森に誇りを持つ地名なのではないかと考えている。

報告 4 永井祐二

第5回ふくしま学(楽)会(2020年1月26日、ならば CANvas)について

- ・第4回ふくしま学(楽)会を踏襲し、第5回は「これまでのレビュー」→「本年度の取り組みの計画と報告」→「分科会対話」→「取りまとめ議論」という流れで実施したい。また、分科会を取りまとめる総合討論のファシリテーションとテーマ設定を改善したいと考えている。
- ・学会の日程は2020年1月26日(日)の午前・午後の1日に集約するが、ふくしま学(楽)会の(楽)の部分として、前日の1月25日(土)に福島第1原子力発電所やその周辺の現場視察や前夜祭などのエクスカージョンも企画したい。
- ・開催場所は、檜葉町みんなの交流館ならば CANvas にする。
- ・内容案

第1部 これまでの展開と夏以降の取り組み報告

- 冒頭解説 松岡さん
- テーマ1 記憶遺産と教訓（廃炉の先） 森口さん、井上さん/小林さん（廃炉作業と作業者の推移）
- テーマ2 文化育成と発信（アート） 安部さん 高校生（地域に開放された文化祭）
森野さん（地域を記録に残す取り組み）
- テーマ3 賑わいと生業（広域 DMO） 橋本さん、大場さん、高校生（福祉との連携）
磯辺さん、青木さん（賑わい創出）

第2部 今後の方向性の軸となる話

- 基調講演 A 宮野さん「廃炉の選択肢と課題（仮）」
- 基調講演 B 南郷さん「学園における先駆的教育と未来予想（仮）」

第3部 テーマ別ディスカッション

- ①～③のテーブルに分かれた議論
- テーマごとの時間軸を予想する「10年後、25年後、40年後」
- 同じフォーマットに落とし込む

第4部 ディスカッション「10年後、25年後、40年後の未来は誰が決めるのか」

- 上記のデータを一つのファイルに集約して、これに基づいてのディスカッション
- 時間軸をあわせるとどのような未来が見えるか
- 世代を代表する4世代×2名程度が議論を行う
- 高校生 高校側から推薦
- 10年後（大学院生） 見学に参加した大学生から選抜
- 25年後（子育て世代） 菅波さん、松本さん、小山田さん
- 40年後（退職間近） 小松さん、島村さん、松岡さん
- ファシリテーター 永井

総合討論

安部:小松課長の開会挨拶に、どのように地域住民に地元への自信を持ってもらうのが、現在の浜通り地域の課題であるとの発言があった。その方法として、講演で紹介された青森県七戸町の町おこしプロジェクトとTURNプロジェクトの経験が参考になるだろう。講演の先進事例では、地理的な地域だけでなく、人にも寄り添うことが重要であることが示されたように思う。

小松:特別な美しい風景がないと地域アートをうまく展開できないだろうと思っていたが、今年の夏に瀬戸内国際芸術祭の豊島会場に行って、景色だけでなく、普段その地域でありふれた人々の日常でもアートの表現次第で地域の自慢・自信になることが分かった。さらに、青森県七戸町の事例を参考し、地域の潜在的な魅力や価値を掘り出す人の存在も重要であると感じた。こうした人たちと協力しながら浜通り地域における地域アートの展開を考えていきたい。

松本:地域に根ざしたうえで新しいものを発展させることが重要である。しかし、始めるきっかけを作るのが難しい。どのように最初の一步を踏み出し、多くの地域住民を巻き込むのかを考える必要がある。

吉田:TURNプロジェクトの紹介にあったアーティストと障害者とともに収穫した綿で糸紡ぎをする話がおもしろかったが、その糸の使い方を知らなかった。プロセスは確かに楽しいが、プロセスを経て生

み出した価値からまた次の活動への意欲を生んでいくためには、プロセスのみならず結果も重要である。浜通り地域で地域アートを開催する際に、アーティストがこの地域のいろいろな構成員の話を何か一つの思いに紡げたらおもしろい展開になると思う。また、人々に地域の魅力を発見させる場面づくりも必要である。

菅波:対話自身の価値を重視するという TURN プロジェクトの思想に共感した。また、ヴィヴィアンさんの講演にあったマイノリティという表現の解説もとても興味深いと思った。原子力災害以降、浜通り地域では様々な立場や経験を持つ人々で多くの対話が行われてきたが、なかなか議論が収束しない状態が続いている。本日の講演は、1F 廃炉の先などの重要事項に関して、どのように対話を進めていくのかという問いに、有益な示唆を与えてくれたと思う。

藤城:私は浜通り地域で記憶継承をモチベーションにアート活動をしてきた。特にヴィヴィアンさんが講演で言及した記録されない敗者の歴史に共鳴した。様々な立場や経験により、人は違う考え方を持つ。そのような多様性を包括して、アートプロジェクトでどう表現するのかを今後考える必要がある。

ヴィヴィアン佐藤:きっかけづくりについては、興味がないもしくは自分とは関係ないと思っている人々の参加するきっかけを作ることが重要である。例えば、立ち話などのような気軽に話せる仕組みを作り、時間をかけてゆっくり進めていくのがいい。

安部:TURNプロジェクトでは、アーティストが福祉施設にいる人々をどのように巻きこんでいるのか。

畑:TURN では、アーティストそれぞれの表現手法をと通して、施設の利用者やスタッフと交流していく。また、TURN LAND では福祉施設などの交流先の人々が主体となり、それぞれが実践してみたいことを意見しあいながら企画を構想し、展開していく。そのプロセスで、アーティストがサポートしたり、アドバイスしたりする。

安部:アーティストの役割は何か、アーティストが関わることで何が変わったのか、とよく聞かれる。TURN プロジェクトにおいて、アーティストのアクションのモチベーションは、ボランティアとして行うのか、それとも自分のアート表現として行うのか。

畑:アーティストにより、それぞれのモチベーションが異なり、活動への関わり方も違う。TURN での交流を通して新しい表現に挑戦したりし、これまで行ってきたクリエーションのモチベーションとは異なる心持ちで関わる人もいる。

森野:私自身を例えると、時の封プロジェクトを始めるモチベーションは大規模な芸術祭の根付いていない場所で、何かできるかをチャレンジしたいという冒険心であった。

安部:アーティストは従来の枠にこだわらず、新しいものを試したいという好奇心をモチベーションに行動するのが多い。

森野:また、現実的な問題と言えば、アートプロジェクトでも芸術祭でも、費用の確保が不可欠である。

松岡:アーツカウンシル東京の場合は東京都の財団からの資金支援を受けているため、採算性については問題ないと理解してよいか。

畑:東京都の資金をもとに事業を展開しており、公共の文化事業としての位置付けのもと、ある一定の安定性はあるといえる。一方で、事業展開に相応する活動の意義と成果は説明していく必要がある。

森野:広野町は文化芸術に対して予算状況がどうなっているか。

小松:文化財保護に関する予算はあるが、芸術がメインになると難しい状況となる。

松岡:文化芸術基本法は、各自治体が文化芸術の役割を見直し、予算の使用を促進しようとする趣旨であるが、市町村レベルでは文化芸術分野に許される支出が少ない。浜通り地域における地域アート展開の支援については、福島県が積極的に関わり、責任を持ってアートへの支援してほしい。

小松:福島県の文化振興は主に教育やまちづくりに関連している。地域アート支援はアーカイブ施設と結びついて県に提案することはできるが、採択されにくいと思う。

ヴィヴィアン佐藤:私は広島県尾道市の観光大使をしている。尾道市からはお金をもらっていないが、私はいつも自分で仕事の機会を作り出している。

畑:文化芸術に関わる事業を、採算性のような経済的尺度ではかることは難しく、文化的な価値とその重要性が理解されていくことが必要である。自治体などへの理解を促すにあたり、TURNを参考事例として活用していただければとも思う。

安部:豊島の場合、福祉支援のやり方は高齢者だけにお金を出すことから、高齢者以外の人々も含めた包括的なネットワークを構築することに転換している。つまり、福祉に対する考え方が変わっている。TURNプロジェクトも同じように、福祉×アートの両輪で社会基盤を変えようとしているのではないかなと思う。

藤城:いわきには「いごきフェス」という福祉×アートのプロジェクトがあり、伝統的な高齢者支援から脱出し、福祉を「地域包括ケア」として捉え、それをアートと結びつけ、地域の包括的なケアネットワークの構築に取り組んでいる。

畑:範囲が福祉に限定されると、興味を持つ人もある一定の範囲に留まってしまう可能性がある。そのため、他の領域とつなげられたら、活動のおもしろみもより出てくるかもしれない。

小松:広野町は福島県でトップ3にも入る高医療自治体であり、高齢者支援の給付金が多い。現在、住宅断熱性の改善や空き家の活用など多様な福祉支援手段を充実しようと考えている。もともと行政だけでは情報が限られるため、新しいアイデアが足りない状態にある。そのため、福祉系の予算で文化芸術と関連させたら、何か新しい活動を企画できる可能性もあると考えられる。

松岡:特に人口減少している地方自治体では、福祉の促進に総合的な取り組みが必要である。アートを活用できたら社会にも大きな利益をもたらされる。

安部:議論の最初に菅波さんが言及された未来会議の浜通り合衆国や浜通り大学のイベントをより詳しく説明していただきたい。浜通りとは一体何か。

菅波:浜通り地域には、いわき市と相双地方が含まれている。地域内の各自治体は気候も類似しており、歴史的にも深い関わりがある。

藤城:浜通り地域の各自治体は、それぞれの特徴を持ちながらも、お互いに違っている。自治体の多様性を保ちながらつながりたいという思いで、イベントを浜通り合衆国と名付けた。

松岡:TURN プロジェクトも同じく、違いによる価値や新しいものを見出そうとするが、違いが逆にお互いに足を引っ張る可能性もある。例えば、被災の12市町村は被災者とまとまっているわけではなく、地域分断の課題を抱えている。官のレベルではその課題を乗り越えることは難しく、民のレベルでどのようにその分断を乗り越えるのかを考えなければならない。

松本:アート事業には資金が確かに重要であるが、より重要なのは、アーティスト自身が活動を続けたいという意欲と、活動を続けられる制度的な仕組み造りだと思う。

森野:アーティストと直接的に交渉したらどうだろうか。

松本:自治体の多くのアート活動においては、行政とアーティストの間にイベント会社が存在し、行政とアーティストとの直接的な交渉はほとんどない。このような直接的なコンタクトがない状況で、どのようにアーティストに持続的に来てもらえるのかはわからない。

小松:地元行政は復興事業の業務量が多く、先のことを考える余力が限られることが事実である。また、ボランティアばかりに頼ってはいけなく、経済産業活動も必要であり、経済効果は価値評価にもつながらず。

畑:アーティストと展開する個々のプロジェクトにおいて、人と人が交流していくプロセスそのものを、クリエイティブな表現の一つとして捉えることもできる。

藤城:一旦始めると、その地域に関わり続けるアーティストが多いと思う。アートプロジェクトには時間がかかり、成果が短期間に見えないという課題があるが、地域に入って時間をかけて何かしようという姿勢自身に価値がある。

松岡:ただ、アーティストだけでは地域アートを持続的に展開するのは無理であり、経済面が分かるマネージャーなどいろいろな人を組み合わせた仕組みづくりが不可欠である。

安部:将来像の時間のスケールについて、畑さんは10~20年、松岡さんは50年、森野さんは100年というようにそれぞれ違うスパンで考えている。30年後、日本の自治体が半数消滅と言われていたが、何年後の将来像を想定するのか、皆様の意見を伺いたい。

小松:地方行政としては10年先が精一杯である。この地域は戦前から石炭をもとにしたエネルギー産業が発展し、住民は戦前のほうが多かった。戦後、出稼ぎ人口を抑えるため、農業をしながら稼げる職場として火力発電所や原子力発電所を誘致し、エネルギー産業を再開した。これから人口減少させないためには、経済産業の観点だけではなく、人々にこの地域が好きになってもらい、ここに住み続けたいと思ってもらいたい。

畑:「地域の人」というのはどのような人たちを指すのか。住民票を持つ人のみなのか、毎日仕事で通う人なども含むのかといった捉え方は、いろいろあると思う。アートプロジェクトのような、いろいろな人が出会い居合わせる場が一つの突破口になると思う。

渡辺:アートは従来の概念を取り払い、物事を再定義する力を持っていると思う。高齢化や過疎化は浜通り地域だけの問題ではないため、ふくしま浜通り文化育成と発信事業によって何か新しいことができたなら、それは良いモデルとなり、他の地域にも有益な示唆を与えてくれる。

紺野:広野町の地元出身の人が少ないのが今までの議論の問題点である。ヴィヴィアン佐藤さんが討論の最初で言ったように、地元の人々を巻き込むための気軽に声を掛けられる場面づくりが重要であると考えている。

鵜沼(福島県):福島県の文化振興が主に伝統文化や伝統芸能に関連し、現代アート関係の内容がない。この点では東京と異なる。地域アート支援を県に提案するなら、広野町だけでなく、双葉郡、もしくは浜通り地域で、ある程度まとまった形で提案したほうが良いと考える。

阿部:震災以降、浜通りに地域にはイベントが多くある。しかし、続かないのが問題である。イベントの数が多く、自分は役場職員としてイベントに疲れているところに、本日のヴィヴィアン佐藤さんとTURN プロジェクトの報告を聞いて、アートイベントの楽しさや役割を改めて感じた。

松本:10年、20年後の予想をしにくい事業の価値には行政としては予算を付けにくい。将来、何かの成果が生まれると認める担当者がいても、2~3年間の任期が終わると政策方針がまた変わってしまう。したがって、10年後を見据えた大きな金額が必要な計画で申請するより、短期間で小さい金額の補助金でもいける、柔軟性のある事業計画のほうが予算をもらえる。

中野:先ほどヴィヴィアン佐藤さんによる気軽に声掛けられる場面づくりの話について、今、早稲田大学と広野わいわいプロジェクトと協力し、地域交流拠点の構築に取り組んでいる。地域アート展開における地域住民の参加促進には交流拠点の活用が期待される。

ヴィヴィアン佐藤:これからやることは前例がなく、名付けられないことである。身分の枠にこだわらず、アーティストだけでなく、誰でもアート作者になれる。

以上